
その九尾、人間につき

碧城 林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その九尾、人間につき

【Nコード】

N7523X

【作者名】

碧城 林檎

【あらすじ】

気が付いたら九尾になっていた。しかしそう悪いものでもない。だっていつでも尻尾をモフモフ出来……ない？ゴワゴワだと……！？早く外に出て尻尾を洗わねば！
そんな感じで送る人外憑依録。

その九尾、苦悩につき

「なんじゃ？ ワシに見せつけに来たのか？」

「うふふっ、あなたとも仲良くなれたから記念にね。ね、ミナト」

「そうだねクシナ。九尾もある日を境に途端に人が変わったみたいになってくれたから俺も嬉しいよ」

「人が変わった……のう」

ミナトと呼ばれた男の言葉に反応して、ワシは自分に言い聞かせるように復唱した。

この見るからに醜悪な九尾の姿を見て「人」が変わったとはよく言えたものだ。確かに中身は人ではあるが、外見はどうみても人には見えないだろう。

それでもそう言えるのは、悔しいことにミナトがイケメンだからだろう。これがイケメンのイケメンたる所以か、チクシヨウ。

聞いてわかる通り、ワシは人間の記憶を持ったまま人外へと憑依した。どういう原理かはわからないがそういうことなので納得するしかない。

それよりも今は大事なことがあるんじゃよ。

目の前で少し大きくなったお腹を抱える赤髪の女性とその横に立ってそれを微笑ましげに見つめる金髪の男性。くそっ……リア充は見ただけでイライラするからム力つくんじゃ！

……そうじゃのうて、その二人がクシナとミナトであり、ワシは

これを前世のナルトという漫画で見たことがある。つまりワシはナルトの世界に来て九尾に憑依した、というわけじゃ。

最初こそわけがわからなかったが、いい加減にもう慣れた。クシナの視点から外を覗いて見ても登場人物がわんさかおったし、信じられないじゃろう。

「そうか。それならさっさと帰るがよい。用事が済んだじゃろう」

「むう。お祝いの言葉の一つくらい掛けてくれてもいいってばね」

「ここから出すなら考えてやらんこともないがのう。どうだ、四代目。良い取引じゃろう？」

「そこまでしてキミからの祝福の言葉は欲しくないかな」

くすくすと笑うクシナに爽やかに笑うミナト。これはあれか？

ワシがこやつらをぶっ殺してもいいというフラグと解釈して問題ないかのう？

しかしこの夫婦は本当にムカつく。こっちは封印されて無理矢理引きこもりにさせられとるのに、リア充滿開で毎晩毎晩見せつけおつて。見たくもないものを見せられる身にもなってみろ。

「男が男のアレな姿を見て興奮できると思うか？　せめてクシナを見れたら……」

「……九尾、思考が駄々漏れてるよ」

「その反動で貴様が封印を解いてくれたら万々歳だったんじゃないのう。そう上手くはいかんか」

ミナトのクシナの溺愛具合から見てこうやって煽れば激情すると思っただんじゃがそうでもなかったか。その代わりクシナの方がこっちを睨んでおるわい。

「私の体はミナトだけのものだってばね。九尾なんかには絶対に見せてあげないんだから！」

「俺の体もキミのためだけにあるよ、クシナ」

「ミナト……」

「……いい加減人の目を気にしたらどうじゃ？」

目の前でイチヤイチヤする夫婦はワシの目には毒でしかないからやめてほしいんじゃ。

「あなたは尾獣だから気にしないででもいいのよ」

「腐れ外道が。精神世界でまでやってすることじゃないじゃろう！ワシの目の届かんとこでやれ！」

しれっと答えるクシナに耐えきれず、思わず咆哮して二人を威嚇した。ワシだって青春を謳歌したいんじゃ。引きこもりなんかやめてリア充になりたいんじゃ。明日がある、明日があるずっと先延ばしにするのはもうイヤなんじゃ！

「そうは言っても九尾はクシナが見ている世界を見れるんだから隠れようがないと思うよ」

「そうじゃのう。四代目の見たくもないアレな格好や、クシナの風

呂での姿も見ちまったから今更か」

「なっ!?!? なんでもそんなときまで見てるんだってばね!」

「ふん、貴様はバカか? 逆に見ない方がおかしいじゃろ。のう、四代目。貴様もワシと同じ立場じゃったから見とるじゃろ?」

恥ずかしそうに顔を赤くするクシナを濁いた笑いで軽くスルーしながらミナトに悪戯っぽい笑みで語り掛ける。

これくらいしかワシの娯楽がないんじゃからそれくらい許してくれてもええじゃろ。

「お、俺はそんな卑怯なことほしないよっ!?!?」

「よく言うわい。自来也といっしょに女湯を覗いておったのはどのどいつじゃ」

「ミナト……?」

「ははは、冗談はやめてくれ九尾! 俺がそんなことをするはずがないだろっ!?!? クシナも信じてくれ!」

「まさかワシが気付いておらんとでも思っとなのか? 目出度いやっじゃな。白を切るならワシはそれでも構わんがのう」

クシナが入つとるところを覗こうとするのは旦那としてどうかと思うが、覗きは男のロマンじゃし、仕方ないじゃろ。ただ、ワシはどちらかの肩を持つ気はない。痴話喧嘩ならワシの見えんところであってくれればそれでええんじゃ。

「あつ、クシナ。安産祈願しとるぞ」

「ふふつ、ありがとう、九尾。さあ、ミナト。用事も済んだし、現実世界でしつかりと話してくれるってばね？」

「だからこれは勘違いで　　！　くそっ！　九尾の裏切り者！」

「ワシがクシナに力を貸すことがあっても貴様に加担した憶えはないわ」

首根っこを掴まれて引きずられていくミナトを少し哀れに思いながらも、やっぱり自業自得なので庇う気はない。

安産祈願の方はワシが封印から解かれ易くするためじゃな。出産時期になると弱まると聞いておるからそこを狙って自由になりたいし、流れてしまつて出られなかったのでは元も子もないじやろう。いろいろと問題はあるが、やっぱりまずはこの尻尾のゴフゴフを直さんといかんのう。いつでもモフモフ出来るように毛並みを整えねば。

え？　　うちはマダラ？　　そんな不味そうなのはいらんわい。

その九尾、厨二病につき

「……なにか用かい？」

「いつまで根にもっとるんじゃ貴様は。そんなに根暗じゃとクシナに嫌われるぞ」

覗きがばれてクシナに干されたからってワシに当たるのは筋違いじゃろう。犯罪者が目の前におつたら誰でも通報するのと同じじゃ。それがリア充で、ワシに自宅警備員を強要されとる憎き相手ならなおさら。

「うふふっ、心配しなくても大丈夫よ九尾。ミナトのことはなにがあっても嫌いにならないから」

「クシナ……。俺もクシナのが大好きだよ」

あー……。コイツらを呼んだワシが馬鹿だったか？

ワシが二人のためにちよつとした提案を持ち掛けようとしたのに二人がいきなり擦り寄り始めたらその気もなくなるってもんじゃ。見せたがりのリア充ほどムカつくもんもおらんのだ。

「ぐっ……だから勝手にワシの目の前でイチャラブすんじゃねー！」

「ごめんごめん。それじゃあ九尾、俺とクシナはちよつとじゃれるよ」

「そうじゃねえわい。許可をとりゃあええっちゆうもんじゃなかる

うて。ええから人の話を聞け」

笑顔でなにを言い出すかと思えば屁理屈を言いおつて。怒る気にもなれず呆れながら注意するという情けない格好になってしまったじゃねーか。

こんなのが四代目火影とか笑わせるわい。里の未来は大丈夫なんじゃろうか？

「そついえばキミの方から呼び掛けて来るなんて珍しいね。どうかしたのかい？」

「なんも用事が無いのに呼びだすか阿呆ども。ワシからちょっとした提案があるんじゃ」

ワシがそう言うのと二人とも猜疑の眼差しで見てるんじやが、あながち間違いではないので反論が出来るん。

「その提案つちゆうのは貴様らのおもつとる通り、ワシの封印を解くことじゃ」

「提案というかそれってお願いじゃない？」

「まあ聞け。人柱力は尾獣を引きはがされたら死ぬってことくらいはしつとるじゃろう？」

「まあね。で、それがどうかしたのか？ キミの封印を解くこととは関係なさそうだけど」

なんで二人ともそんなに興味がなさそうに相槌を打ちながらさり気無くイチャついとんじや。まるでワシがぼっちみたいじゃからや

めてくれ。引きこもりに加えて二ト、拳句ともだちがいないなんて人生寂し過ぎる。

そろそろ泣くぞ？

「関係は大ありじゃわい。クシナの出産のとき、封印が弱まればワシは無理矢理外に出ることが出来る。まあこつちも無傷じゃあ済まんだろうが、クシナの方はそうはいかん。最悪の場合は死ぬじゃろうな」

ワシがそう言うのだらしく二人の緩んでいた表情が引き締まり、空気もピンと張り詰める。

そうじゃ。そうやって聞いてもらわんと話し甲斐がないんじゃ。

「ふうん。つまり九尾はクシナを人質に俺たちに交渉を持ち掛けて来たってわけかい？」

「はあ……勘違いすんな。ワシはお前らのためを思ってやってやるとるんじゃ。これは提案だと言っておるうに」

真剣に聞いてくれるのは有り難いが疑われるのは御免だ。再生能力があるからといって痛くないわけではないんじゃし、ワシは安全で確実な方法で外に出たいんじゃ。

「私たちのため？ どういうことだつてばね？」

「ふむ……例えばの話だが木の葉を潰さんとする者がおつて、そいつが写輪眼をもつとつたとする。もちろんクシナの出産予定日も把握済みじゃ。もしかが貴様らがその立場ならどうする？」

「随分具体的な例えだね。里の内部に謀反者がいると言いたいのか

い？」

「そういうことを言うのはいくら九尾でも許せないってばね。不謹慎でしょ？」

そういつて火影夫妻はワシを睨みつけてくる。

まあ、証拠もなく身内を疑われればそうなるじゃろう。

「前提条件としてその人物は里の人間でないとすればどうじゃ？」

「ちよつと待つってばね！ 写輪眼はうちは一族の血継限界。間違つても外に漏れるものじゃないわ」

「言いたいことはわかるが前提を崩すな。飽く迄仮定の話じゃろうて」

クシナが熱くなつとるのはウチは一族に友人がおるからじゃろうな。名前は忘れたがサスケの母親だったはずじゃ。

クシナを通して何度も見たが美人じゃった。道理でイケメン兄弟が生まれてくるわけじゃわい。

「まあ、普通では絶対に有り得ないことを仮定して議論するのは普通なら無駄だと言えようが、ちよつとくらい考えてみい。ほれ、四代目はどうじゃ？」

「うん……そうだね。キミの出した前提条件で話を進めると、俺なら封印が弱まるところを狙って引きはがして写輪眼で九尾を操って襲撃させる……かな。大雑把だけど大体はこんな感じだよ」

「ミナト……」

「まあまあ、例えばの話だから。それでこの空想がどうなるんだい？」

流石は里の長というもののなのかのう。相手の立場になった場合に自分ならどうするかという考え方は一流じゃ。そしてその相手も一流じゃからそれは吊り合う。

もし相手が脳なしの力だけの三流ならば裏を読み過ぎて外れるという可能性が高いが、今回の場合はワシも原作を知っておるし、だいたいそんな感じじゃったから大丈夫じゃろう。

言うなれば出来レースでマダラを嵌めてウハウハじゃ。あわよくばワシの平穩のために是非とも死んでもらいたいが、高望みをする と失敗する可能性が高くなるので今回は弁えよう。

「今度はその空想が現実になるとしよう。そうすれば貴様ら二人も無事では済まんじゃろうし、その腹のガキの命も危ういどころか里が壊滅する可能性もある。」

ワシにとってそんなことはどうでもええんじやが、貴様らにとつては大事なことじゃろう。そこで、ワシが一つの策を考えた」

「随分と都合がいいってばね」

「何度も言うがこれはあくまで空想であり、貴様らのための話じゃからな」

「それで、その策ってというのは？」

ミナトはちょっと興味を持ってくれたみたいじゃな。クシナもなんだかねでちゃんと聞いてくれとるし、案外良い飼い主じゃ。

「ちよつと遠回りをするか。先も言ったが人柱力は尾獣を剥がされれば確実に死ぬし、尾獣によって無理矢理封印を解かれた場合も死ぬまでには至らんが重傷を負う。ただ、人柱力の意志によって封印が解かれた場合はどちらも無傷で別れることが出来るんじゃないよ」

「そ、そんなこと聞いたことないってばね！」

「当然じゃ。尾獣のチャクラは触れるだけで人間にとっては有害で、任意であれ、尾獣が望めば人柱力を殺すことなど容易いこと。もともと獯猛で悪意しか持たん尾獣はそれを抑えようとせんからのう」

任意での解放ということすら希少な例であるし、尾獣だって人間に飼いならされるといふのは不本意じゃろう。ワシとて例外ではないが、クシナを傷付ける理由は特にない。ミナトなら殺すかもしれない。のする気はない。

それと『それなら他人が封印を解いても尾獣に傷つける意志がなければ大丈夫ではないか』と思うじゃろうがそれは違う。

意志、というのは強いものでな。他人に封印が解かれたらそれを抑えようとして無意識に抵抗してしまうもんじゃない。

それによって能動的に傷付くことが出来るので他人が解放するのはよろしくない。

「しかしワシはクシナに牙を剥く気はないから安心せい」

「もしそうだと仮定して、その続きはどうなるんだい？」

「うむ。クシナによって解放されればワシもクシナも無傷で離れられる。そうすることによってさっきの空想は意味をなさなくなり、ワシが暴れることも、クシナが死ぬこともなくなり、その空想に出てくる人物の計画は水の泡となるっていう寸法じゃな」

それであいつが止まるかどうかはわからんが、ワシを敵に回せば本末転倒じゃろうから安心してもらええかのう。念には念を入れるが。

「キミの考えてることはよくわかったよ。それで、なんで俺たちに話そうと思っただんだい？」

「……そういう非現実的妄想を垂れ流しにしたい年頃、ということにしておけ」

「ふふつ、そつか。俺にもそんな時期があつたからよくわかるよ」

ニコニコしながら肯定してくれたのはいいんだが、自分に黒歴史があつたことまでは伝えなくてもええ気がするわい。

まあ、それもワシの考えが読み取れたからなんじゃろうな。

何度も言うが、これはこいつらのための提案じゃ。ワシがこんなことを提案するメリットなどは存在しない。

普通に考えたらわかるじゃろうが、ワシは外に出られればそれで満足であり、これと違ってそれ以外の願望は現在はまだ持ち合わせていない。だからどんな方法であれ、解放されるだけで満足なんじゃ。

それをこやつらも知っておるじゃろうし、そう思わせるために何度も何度も出せと言ってきた。そんなワシが手段を強制するということは、なにかがあるということを示している。

流星は火影じゃのう。そんなことまで読み取られるとは思わんかったわい。

「ちよつと！？ なに二人だけで納得してるんだつたばね！」

「これを空想と取るか現実と取るか、解放するのか解放しないのか

は貴様の決めることじゃ。ワシは貴様がそう決めたのなら反発せんわい。もとより、する意味がないからのう」

「そういうことだよクシナ。俺といっしょに考えるのは当然だけど最後に決めるのはキミだ。迷いがあれば絶対に成功しない」

「だからなんの話だってばね!？」

ワシの飼い主は状況がさっぱり理解出来んらしい。というか証拠もないのにワシの話をすんなり受け入れるミナトの方に問題があるんじゃない。

ワシがウソをついとるといふ風には思わんのか、この馬鹿は。

「さっさと帰って相談しろ。ワシは当日まで待つわい」

「うん、ゆっくりと話合って決めさせてもらうよ。それじゃあね、九尾」

「だから待って」

ここ、本当にクシナの精神世界であつとるんじゃないか。今確実にミナトがどっかに連れて行ったぞ。しかも消える感じで。

「……まさかここはミナトの精神世界でワシには幻術がかけられておるとかいう展開来る?」

そしてまた、厨二病を悪化させてしまった。

その九尾、従者につき

「覚悟は決まった、かのう」

目の前にいるクシナの表情を見ればそれくらいはわかるが、口に出さずにはいられなかった。

なんというか、自分に言い聞かせるようなもんじゃな。

「ええ、それじゃあ行くわよ？」

「本当にええんか？」

「もちろんよ。考えて考えて、自分で出した結論だから。それで九尾には迷惑を掛けるかもしれないけどそこは許してね？」

「ふん、ワシに謝られても困るわい」

「ふふっ、そうね。それじゃあまたね、九尾」

そう言っただけクシナは儂い笑みを浮かべながら封印を解く。わけもなく、精神世界から消えて行ってしまった。つまりクシナはワシを飼いつづけることを決めたわけじゃ。

あやつもあやつなりにいろいろと考えたんじゃないろう。

まず第一に自分のこと。

これはミナトが四代目火影だからないとは思っただけ、任意で尾獣を解放させれば里から迫害を受けたり、酷くて追放されることもある。火影が何と言おうが里の人間から見ればそいつは悪にしかならん。

じゃ。

適当に理由をつけて「もしかしたら」という仮定で人を淘汰するという方法は世界にもあるらしい。

そして第二に里のこと。

ワシがいくら言ったところで所詮は尾獣。信憑性もない話を信じろというのには無理があるじゃろう。自分が無事に解放されるための方便、と三代目にも言われたしのう。

べつに恨んではおらんぞ？　ワシが逆の立場ならそう言うじゃろうし。

それにもし解放したとして、変化をしても尾獣は尾獣。知らぬうちに里の人間を傷付ける可能性もあるわけで、そんなヤツを里の中に置いておくわけには出来ん。

そうなればワシは一人で森でひっそりと暮らさねばらんわけじゃ。それはワシにとって好都合ではあるんじやが、クシナやミナトにとってはそうではないらしい。

一人で生活するということは、身に降りかかる全ての危険を自分で解決せねばならないということでもある。マダラがそこを狙ってきて、木の葉を襲撃させるように手向けるかもしれん。

そうなりやあ本末転倒じゃ。里を守るために突き放した九尾が里を壊しに来るんじやからのう。

もちろん、そのときに「復讐」なり「報復」なり言ってワシを悪く言うヤツも出てくるし、里の人間は「どうしてあるとき封印しなかったんだ」と四代目か三代目に文句を垂れる。里を守るために長を務めとる人間がそんなことを言われて反論できるわけもなく、復興もままならず木の葉は終焉迎えた、という結果になり兼ねん。

そして最後にワシのこと。

クシナはなんだかんだでええ飼い主じゃ。ワシがこうして打ち解けたのもあやつの持つなにかに惹かれたからじゃろう。

ここからは推測、というかそうあってくれたらという願望に近いものになるが、聞いてくれ。

もちろん、上述したようなことにならないためにワシをずっとクシナの中に封印しておく、という考えもあると思う。

しかし、たぶんじゃが、そうじゃない。あやつらはワシを一人にしてしまうことが苦痛なんじゃ。

あの二人も無駄に歳を重ねているわけではない。孤独な人間を幾度となく見てきている筈じゃ。そしてそれを救えないもどかしさも味わっておる。

だからこそワシを孤独には出来ん。尾獣といえど心はある。人と同じように感情の起伏もあるし、意志もある。

これを人が聞けばほとんどの人間が笑うじやろう。それでもクシナは受け止めてくれて、理解して、ワシの『主』としての務めを果たしてくれる。

里よりも、自分よりも、ワシのことを考えてくれて、封印は解かない。自分が死ぬまでは自分が飼い続ける。それが主としての義務だろう、と。

まあ、そういう願いじゃよ。ワシもいつの間にかここが居心地よく感じるくらいに丸くなっちまったしのう。

本当にええ飼い主じゃよ、クシナは。

しかしそれも今日でお終いらしい。どうやらワシはマダラの手によってクシナから引きはがされ、外に出されちゃった。

「写輪眼」

気付けば目の前に仮面の男。その仮面に開いた一つの穴からは紅く光り、黒い三つの勾玉模様が見えているわけじゃ。

本来ならここで詰んだじやろう。原作通りに暴れ回って被害甚大、火影夫婦も死亡し、二人のガキにワシのチャクラが封印される筈だ

った。

しかし……のう。それを知っておって対策を打たんわけがなからうて。

「なっ!? 写輪眼が……」

「甘いのう。貴様は砂糖か何かか? 幻術の対策程度、しておらんとでも思ったか?」

もともと引きはがされる気はなかったが、四代目から念のために幻術返しを眼球に仕込まれとったんじゃ。念には念を入れる、と前回に言ったるう。

「九尾!」

「おう、四代目か。やっぱり外はええのう。空気がええ。久し振りに本物の酸素を吸った気がするわい」

原理はわからんがいきなり飛んで来てワシの頭に乗るミナトに対してカラカラと笑い掛ける。こころの底から笑ったのなんて久し振りじゃ。

「懐かしむのはあとにして、さっさとあいつを片付けるよ。出産とキミが引きはがされたのが重なって危ない状況なんだ」

「……自然に話しちまったがなんでワシの頭の上に乗るんじゃ」

「いいからいいから。ほら、行くよ」

「解せんのお……」

誰かを頭に乗せるというのは気に食わん　それが憎きリア充
相手ならなおさら　　が、時間がないならええじゃろう。洪々了
解してやったわい。

それよりも九尾の上に四代目火影が乗るといふ構図はどうなんじ
や？　いろいろとまずくねー？

徐々に集まってきたている忍たちが驚愕の表情を浮かべ取るが、あ
んま気にしたらいかんのかのう。

「とりあえず場所を移すよ、九尾」

「……そうじゃな。それならさっさと適当な場所に転移せい」

移動するのは恥ずかしいからとかではなく、里の中でワシが暴れ
るのは無理があるからじゃろう。

それにワシのチャクラにあてられてクシナの現状を悪化させても
困る。

そんなことを考えているとなんとも親切なことに仮面の男はワシ
らに付いて来てくれた。馬鹿かと思っただが、狙いはワシを操って（
幻術返しはある程度の術者なら簡単に解除できる）木の葉を壊滅さ
せることなので当然か。

「さあ、行くよ九尾！」

「足い引つ張んじゃねーぞ、四代目」

ムカつくことにクシナ以外のリア充の従者として、初陣は開幕す
るらしい。

その九尾、安息につき

「チツ……逃げたか」

「まったく……九尾がむやみやたらに暴れ回るからだろ？ あんな狂暴な動きをすれば誰だって逃げるよ。俺だってただのお荷物みただったじゃないか」

「知るか。ワシはまだ術とかわからんし、ただチャクラの塊をぶつけとっただけなんじゃがのう」

「その密度が酷いんだって……」

マダラを逃がしてしまったのは不覚じゃったが、今回は撃退できただけでも良しとするかのう。

ミナトがワシの頭の上で呆れた様に溜め息を吐いているが、それはワシのせいではない。ただチャクラで作ったビームを連発したのにワシのせいにするのは理不尽じゃろう。正当防衛じゃよ。

「それよりどうするんじゃ？ 本当に大変なのはこれからじゃろう？」

マダラと戦うことはそれほど苦でもなかった。もともと撃退すればノルマは達成じゃったから当然といえば当然じゃろう。

それよりもワシが気にするべきはその後のことじゃ。

里の壊滅は免れたが問題はそこではない。これからのワシの動向が問題じゃ。

このままワシが木の葉からいなくなれば前回言った様なことなることは間違いないじやろう。それを避けるためにも、四代目がなんとかしてワシを木の葉に残さなければならぬ。

こう言えば簡単そうに聞こえるが実際はそんな簡単なものではない。事情を知っていても反対する人間は9割はいるだろうし、それを四代目が説得できるとも思えん。

そこで打開策としてまた封印するという手が挙がるがそれだけは却下じゃ。そんなことなら全力で逃げるわい。

「そうだね。取り敢えずは変化の仕方を教えるから人型になってよ」

「小さいサイズの方が便利じゃから、まあええか」

里の中に入れてもらえるかどうかは別として、このサイズのままいるというのは結構辛い。なにより尻尾を洗えんのが苦痛じゃ。

そういうことでワシは教えてもらった通りに印を組み、人間の姿へと変化した。

「……それはなに？」

「わかつとらんのう。尻尾とキツネ耳は必須じやろう、馬鹿者。ワシのアイデンティティをなんじゃとおもつとるんじゃ」

「これから真面目な話をしに行くのにその格好は……まあいいか。とりあえずこれを羽織って。行くよ」

「うむ」

変化した姿は裸なのでミナトのマントを受け取り、それで羽織ってミナトの服を掴み、瞬間移動をする。

性別が未定なのでとりあえずワシの元々の性別である男の姿として人間の姿になったのだが、やはり今は九尾なのだから、耳と九本の尻尾だけはサイズを小さくして残しておいた。なによりいつでもモフモフ出来るようにしておきたいしな。

「そういえばクシナの方はどうなんじゃ？」

「重症だけど医療班に任せておけば大丈夫だよ。うちの医療班は優秀だから」

「そりゃああなたによりじゃな。これで死なれたら後味が悪いからのう」

まあ、ワシの言う通りにせんかった自己責任だとも言えるが、そこまで深く明言してやるほどワシも鬼じゃないわい。

「……ん？ それならなんで急いどったんじゃ？」

「早く産まれてきた子供を奥さんと一緒に抱きたいだろう？ もっとも、それはもう少し後になりそうだけどね」

「惚気んなクソツタレ……」

顔の表情筋をだらしなく緩ませるミナトに怒りを覚えながらも、いつも通りの様子で少し安心した。これなら強がりではなく、二人とも本当に無事なんだろうことがわかるから。

そうこうしている内にワシらは三代目の家に着き、その中へと入っていった。無断侵入とか、そういうのではないと思いたい。

「なんじゃあれは……」

ときは少しさかのぼり、ミナトと九尾、それに相対している仮面の男の戦闘を見ながら三代目は呟いた。いや、それは戦闘というよりは一方的な暴力だ。無慈悲な質量で押し切るような、腹の底が冷える様な、冷たい暴力。

それはわかる。しかし、わけがわからなかった。

どうして四代目と九尾が共闘して仮面の男と対峙しているのか。確かに仮面の男が悪であろうことは感覚にしてわかる。が、それよりも絶対悪である九尾が何故人間と共闘しているのか。そしてなによりその絶対悪を何故四代目は先に討たず、あまつさえ味方であるよう振る舞っているのか。三代目には全てがわからなかった。

そしてそれは三代目に限らず木の葉の忍全員が同じ気持ちであり、そして敵対している仮面の男ですら同じだ。

仮面の男はただ一つ、この尾獣に対して勝つことなど不可能だということにはわかっていた。

それもそうだろう。理性なしにただ暴れ回る飢えた獣なら話は別だが、それは明確に理性を保ち、敵対する対象を一つに絞っているのだ。

そんな凶悪で強大で鋭利な暴力を一点に集められれば、勝てると思える方がおかしいというもの。

それをわかってか、数分も経たない内に仮面の男は姿を消した。

「ワシらの出番はなし、か……。いや、出番があるという方がおかしいのか」

圧倒的な力を前に動くことすら出来なかった自分を悔みながらポツリと零した。それほど気にすることではないとわかってはいるが、やはり老いてしまったことを惜しく感じてしまう。

若ければ自分もあそこで　　とは、思うが、現実を見るとあま
り思いたくはない。

そんな情けない自分に呆れて一つ息を吐き、九尾の騒動により集
まって来た忍たちを散らせる。自分も早く自宅に戻って、あの一人
と一匹を待たなければならぬだろうことは想像に易かったから。

その九尾、失踪につき

「四代目はどういうおつもりだ？」

「あまつさえ九尾と共闘するなど……」

「敵にするのは確かに厳しい。が、それでもあの仮面の男くらいなら四代目一人でも撃退できただろうに」

ワシと四代目が三代目の邸宅に着き、議場になるであろう部屋に入ろうとすると中から声が聞こえてきた。

それが気に食わんのか、四代目はぐつと握り拳を作っておる。そうやって人のために怒れるところは嫌いではないが、ワシのことなんかでいちいち怒ったたらキリがないじゃろうに。

つーかあれじゃ。忍なんじゃから感情を抑えろ。そして中のヤツらもワシらの気配に気付け馬鹿。

「そつだ。不抜けていたのなら早々に再度封印すればよかつたものを」

誰が言ったかはわからんがちよつと今のは聞き捨てならんのだ。

あの状況で封印じゃと？ 馬鹿を言うなよ。そんなことをすればマダラに隙を見せて里を落とされるのがオチじゃ。

それに満身創痍のクシナに封印なんかすりゃあどうなるかくらいは猿にもわかるじゃろう。

「本当に無能で自己中心的なヤツらばかりじゃのだ。いっそ一度初期化した方がええんじゃないやなかるうか。手伝うぞ？」

「やめとくよ。みんなは里のことを思っ言ってくれてるんだから」

そんなことを言いながら一番怒っるのはお前じゃろう。強く握り過ぎて手から血がぽたぽたと垂れとるぞ。

それに誰も里のことなんか思っておらん。中にはそういうヤツもおるかもしれんが、忍だっ一人の人間なんじゃし、全より個の方が大切に決まっとる。

自分の身に危険が降り掛かることしか気にしとらん。それに里がどうかみんながどうか、大衆のためと銘打って正当化するなど、底が知れるわい。

いつの時代もどこの世界も、人間というのは代わり映えせんから吐き気がするくらい面白いのう。

そんなことを思いながらワシとミナトがその部屋に入ると、ざわざわとしていた空間が一気に鎮まり、少し気まずそうに四代目を眺める。

そういうことをするんなら最初からせんかったらええのに、こやつらは阿呆じゃろう。

まあ、それはええとして、ここには結構なメンツが揃って円卓を囲んでおった。

相談役にダンゾウ、それに旧家の家長。ざっと数えるだけでも二十人はいようかという多さじゃが、事態が事態なのでこれは仕方ないことか。

「四代目、その妙な格好の人物は？」

「彼は九尾だよ。今は変化の術で人の姿になってるんだ」

いずれはわかることじゃったが、今言う必要なんかなかるうに。

お陰さまで気まずさを振り払うためにワシに物理的干渉があるので

はないかというくらい視線が刺さるじゃねーか。

「どういってもりですか？ 里の中に九尾を招き入れるなど……」

「そうです。今ここで暴れたらどうするつもりですか！」

「大丈夫。九尾はそんなことはしないさ。それに暴れるつもりなら封印から解かれた瞬間に暴れてると思うよ」

マダラ相手にちよつと運動したから余程のストレスを感じん限りは暴れんと約束は出来るぞ。まあ、ストレスを感じなければ話じやがな。

そう思ったが、口に出したら警戒されそうなので止めておいた。

「しかし四代目を騙しているのかもしれない。狐は元来から人を騙す生き物です」

「騙す理由はあるのかい？」

「そんなの味方を装って寝首を搔くからに決まっておるじゃろう」

不機嫌そうにダンゾウが漏らすと、それについて賛同の意見が議場の半数を占める。そして「そんなこともわからないのか」という四代目への不満の空気も流れ始めるくらいだ。

やはり過激派と穏健派は半々くらいなのか。べつにどうでもええけど。

「それについて証拠はあるのですか？ 彼はボクの大切な人を守ってくれた恩人でもある。軽々しくそのようなことを言われるのは釈然としませんよ。」

それにボクに協力して里を守ってくれたのも事実です」

「その九尾がおらんかったら里が狙われることもなかったじゃろうに」

「しかし九尾の所属が木の葉でなければここまで大きな里にはなり得なかったでしょう」

「大小の問題ではないのではないか？ 里は里。今の発言は小さければ守る価値もないという風に聞こえますな」

「大きくなることが出来たのは国家間の戦争があったからこそ。そのときに活躍したのが人柱力であり、彼女たちがいなければそもそも木の葉の里がなくなっていたという可能性もあります」

ダンゾウとミナトの言論により、更に議場の雰囲気が悪くなってきた。

ミナトの言うこともダンゾウの言うことも一理あるじゃろう。しかしそれはいくら話したところで無駄でしかない。鶏が先か卵が先か、因果性のジレンマを議論するようなもんじゃ。

「論点がずれ過ぎじゃろう。ワシはワシをこれからどうするかを決めにきたのじゃ。そんなくだらんことを聞く気はない」

「九尾の言う通り、ミナトもダンゾウも落ちつかんか。今は九尾の処遇をどうするかが先決じゃろう」

そう言われて二人とも言い足りなさそうな顔をしながらも、おずおずと引き下がった。

ふむ、どうやら三代目のじいさんとはなかなか気が合うらしい。

頑固っぽいからあまり見んようにしておったがそれでもないんかのう。

「見ての通りワシはこうして暴れんとおるわけじゃが、貴様らはそれが演技だと言ってワシのことを信じられんのじゃろう？」

わかつとつたが、全員で一斉に頷くのはやめてくれ。かなり哀しくなるから。

「無理もないわい。言い伝えでは性質の悪い妖狐じゃからのう。しかし、じゃ。ワシが暴れたという証拠はあるか？ それはあくまで伝承の上だけで語られてきたことではないのか？ 自分の目では見たこともないただの噂に尾ひれ羽ひれをつけて拡大させただけではないのか？」

そういうとその場にいた全員が黙りこみながら俯いた。

ワシが過去になにをしたのかはわからん。が、それはこやつらも同じだろう。

こういうのはこの体が九尾のものでなければ先程の因果性のジレンマの議論となにも変わりはないが、生憎これは九尾の体じゃ。

ワシがなにもしていないと主張すれば、それに反対できる人間などいる筈もない。

「わが身がかわいくて危険だと思いきみ、自由を奪ったのはどのどいつだ？ 悪でもないものを悪だと決めつけ、ワシを見せしめに自分たちを正当化して英雄を気取ったのはどのどいつだ？ それら全て、貴様らだろう」

「しかし火の無いところに煙は立たないと言っだろう！」

キツと睨みつけると怯えながらもそう主張する人間が出て来て、それに乗っかってワーワーと批判の声が高まる。

「その火を焚いたのは貴様ら人間だということがわからんのか？
ワシら尾獣は人知れずつと森の中でひっそりと暮らしておった。
それなのに人間が草木を踏みわけ、ワシらの住処の食糧を根こそぎ奪っていく。そしてワシらを見つけた貴様らはあまつさえ敵対し、
なにもしていないにも関わらず攻撃してきたのじゃ」

「話せばわかるのにそっちが話さなかったのではないか？」

「ハッ、笑わせるな。話す暇を与えずに攻撃してきたのは人間じゃ。
自分の命を守るために敵を排除するのは当然じゃろう」

正当防衛といえはわかりやすいだろうか。誰だつていきなり襲われれば反抗する。自分の住居を許可もなく荒らされれば排除するに決まっておろう。

「やはり野蛮だな。また新しい土地を探せばいいだけの話だろう」

「馬鹿を言うのも大概にしたらどうじゃ？ 自分たちも自分の国の領土に他里の忍が侵入すれば排除するくせに、なにを偉そうにそんなことをのたまえるのか。ワシのやつとすることは人間のやつとることなんも変わらん。」

自分たちのことは柵に上げて人を罵るなど、滑稽じゃのう」

我慢しろ？ ふざけるなよ？ こつちは人間と違って体も大きければ消費カロリーも高いし、燃費も悪い。

何年も掛けて見つけた最良の土地を人間の都合で奪われ、そんなことを言われれば黙っていられる筈がなからう。

最初こそはこちらが潔く引こうと思ったわい。人間が居住範囲を広げることは悪いことではないからなう。

それだというのに人間はわかるうともせずには危害を加えてくる。もう無理じゃ。そうまでしてなにもされたくないなら、菩薩でも観音でも踏みにじればええ。

たぶんみんながそういう気持ちじゃったに違いない。

「……はあ。これでわかったじゃろう。貴様ら人間とワシら尾獣の馬が合うことは絶対はない」

「そんなことはないって！ みんなもわかるうとすれば九尾が悪くないことくらいわかってくれるよ！」

「つくづく甘いのが、四代目。人間の気持ちというのはそう簡単には払拭されん。わかり合えるときなど来る筈がなからうて。全ての人間がお前やクシナの様ないいやツなわけがないじゃろう」

先入観っていうのは生まれながらにして植え付けられた固定観念じゃ。それが揺らぐことは決してない。心のどこかで必ずそう思っておる。

そしてワシは自分に向けられる悪意を敏感に察知してしまう。もともと、封印されずにここにおることなんか出来んかったんじゃよ。

「まあ、クシナによろしく言っておいてくれ。ワシはなかなか楽しかったぞ。それじゃあ行くとするわい」

ニヤリと口角を持ち上げて、それだけ告げてワシは窓から飛び去った。

もう会わんじゃろうし、もうちょっとカッコつけたかったが、まあええじゃろう。

その九尾、継承者につき

「くっ……」

九尾が出ていったのを見て捕まえ損ね、ミナトはギリギリと齒を鳴らした。

今から追えば間に合うだろうが、現在は会議の途中であり、里の長である自分が抜けることなど出来る筈もない。

一応羽織に術式を組みこんでおいたのでいつでもそこには行けるものの、それを九尾が脱ぎ捨てれば何の意味もなくなってしまう。

とにかく今は一刻も早く全員を納得させ、彼の後を追うしかない。しかしそのことばかりを考えていては焦燥して意見はまとまらないだろう。

そこまで考えてミナトは一旦大きく深呼吸をして、そこにいた全員を見渡した。

「みんなには事の重大さをわかってもらいたい。彼は九尾だ。彼が今ここからいなくなれば大変なことになるし、他里につかれえるとかなりまずくなることは容易にわかるだろう」

「それはわかるぞ。しかし人柱力として活用すればいいのではないかと、ここにおける全員が思っておるわけじゃ」

三代目の発言にその場にいた全員がコクリと頷く。その考えに關してもミナトは賛成ではあるが、九尾を思うと反対しなければならぬ。

いつも外に出せとしか言わなかったくらいだ。封印を解いてやれ

ば満足だっただろう。現に、それ以上は望まずに自分から孤独になることを選んでいる。

だがそんなことをしていいのだろうか。いや、彼の感性は人間とにも変わらないのに、人間ではないかのように扱っていい筈がない。

ミナトからすれば、九尾は既に家族のようなものなのだ。

「九尾はやつと自由になれたんです。ボクたちはまた彼から自由を奪わなければならないのでしょうか？ 奪う権利があるんでしょうか？ 自分たち人間の都合でまるで道具のように扱っていいんでしょうか？」

ミナトがそう言うほとんど人間が押し黙った。

さきほどの九尾の話を聞いていれば普通はそうなるだろう。自分に置き換えてみれば、それがどれだけ苦痛なのかわからないほど人間も馬鹿ではない。ただ、そうやってやられる側の叫びを聞かなければ置き換えることが出来ないだけだ。

九尾の扱いは今で言ういじめにあたるものがそれに近い。いじめられる様なことをする方が悪いといじめる側もそれを肅正すべき教員や大人も主張して、自分たちに非があることを絶対に認めない。そしていじめられていた子がキレるとそいつらは親に泣きつくんだ。そうして怒られるのはいじめられっ子。

普通の感性をしていたら馬鹿げているとしか思えないだろう。

「そうしなければならんのだろう。昔からそうしてきたんじゃ。前例がないことは認められん」

「誰かが始めなければ前例なんて産まれない！」

「それをワシらがやる必要はないと言っているのがわからんのか？」

だがそれでも納得しない者もいる。ダンゾウのように、一つのやり方が最善だと主張する頑固な人間だ。

彼の言っていることも強ち間違っているわけではない。前例がないからやっつてはいけない、というのは誰もが耳にしたことがあるだろう普通の意見だ。

しかしミナトの反論も正しい。誰かが始めなければ絶対に変わることもなく、今の文明より進化することは絶対にならない。ゆえにどちらも正しいし、正しくない。

「そうやって先に先に見送って今まで変化してこなかったのが事実です。これ以上誰かが不幸な思いをしなければならぬ理由なんてない筈だ。それがたとえ尾獣であっても」

「ふん。火影が尾獣に肩入れとはな。ヒルゼン、貴様の後釜に任命したのは間違いではないのか？ 里の人間のことは省みずに人間ではない九尾を庇おうというのだぞ？」

「過ぎた発言は止せ、ダンゾウ。それは今関係ないことじゃ。ミナトも構わん、続ける」

妙に突っ掛かっていくダンゾウを三代目が制止し、ミナトに続きを話すように促した。

「人間だとか人間じゃないとか、それがどうだと言うんです？」

「なに？」

「人間だから善なんですか？ それは違うだろう？ 善悪に種族なんて関係ない筈だ。問題なのはその者が今までどうして来たかだろ

うっ？」

そこまで言うとは今度こそダンゾウも押し黙らざるを得なかった。屁理屈をごねることは出来ても、それはあくまでも付け入る隙がある場合の話だ。

完璧な言論というのは存在しない。しかし議論では相手にその隙を見つからないようにすれば勝つことが出来るのだから、将に正論を説いているかのように魅せればいい。

「悪は断罪しなければならぬ。それは人間も例外ではなかったはずだ。種族は関係なしに、その者の経歴だけで判断してきた。ここまで言えばわかるだろう。後は九尾の言っていた通りだ」

「じゃがのう。ヤツが安全である保証がない限り里に野放しにしておくわけにもいかんだろう」

「保障ですか。そうですね……ん？ 誰だい？」

全員がミナトの言いたいことは理解出来る。ただ、理解は出来ても納得できないだけなのだ。

そう思いながら三代目に全てを委ねて、彼がそれを代弁したところで議場に一人の人間が現れた。

「いえ、波風クシナ殿の容体をお伝えに参りました」

その人間がそう言うとその場の空気はピシリと固まった。

「それで、どうなんだい？」

「はい。命に別状もなく、治療を続ければ傷も完治して以前と変わ

らないように過ごせるかと」

それを聞くとミナトと三代目は笑顔を取り戻し、他の人間たちは驚愕の表情を浮かべる。

それもそうだ。尾獣を引きはがされれば例外なく死ぬ。その死因も尾獣による人間には有害な憎悪の塊となったチャクラが原因だとも断定されている。

それがないということは、九尾が安全だということを証明している様なものだ。

それは人間を騙すための策略だと主張する者も中にはいるだろう。しかしそうまでして九尾が人を騙す必要がないということも心の奥底では理解している。

例えクシナが死亡したところで、それは自然なことであり、九尾が責められることではないとわかっているから。

だからこそ、誰もミナトの意見に反論が出来なくなってしまった。

「決まったね。彼は里で保護させてもらう。ただ、すぐに信用しろというのも酷な話だろう。そこで彼が九尾だということは伏せて、彼にここで一ヶ月過ごしてもらうことにする。その間に問題を起せばボクが責任を持って再度封印をする、ということの問題ないですよね？」

いつも通りのさわやかな笑顔を浮かべるミナトに、渋々ながらもそこにいた全員が頭を縦に振った。

これは四代目の実力と人望があつてこそそのなせる技だろう。あの九尾相手にも引けを取らないという信頼を得られるほどに、彼の実績は優秀なのだ。

そしてそんな彼を後釜に任命したことを三代目は誇りに思っており、得意げな表情をしてダンゾウの方を見た。

「チツ……失敗すれば首はないぞ」

「ええ、わかっています。ボクは彼を信頼していますから」

イライラしながら捨て台詞を吐くダンゾウにもミナトは笑顔で返し、三代目と目を合わせて微笑み合う。

「それではボクは九尾を追うので失礼します」

それだけ残し、ミナトは一瞬のうちに姿を消した。

残った一同も三代目に挨拶をしたあとに帰っていき、そこにはただ一人三代目だけが取り残される。

「九尾も火の意思を継ぐ、か……」

ふふふ、と自分の発言に酔いしれながら、彼は空に浮かぶ満月を見つめた。

その火影、覗き魔につき

「……なにやってるの？」

「おお、四代目。やっぱり生身で入る温泉はええのう」

自身の羽織のある場所へと飛雷神の術で飛んできたミナトだが、目の前の惨状を見て頭を抱える。

後ろには女湯の暖簾。目の前には白濁色の湯に浸かってタオルを頭に乗せ、桶を湯に浮かべて熱爛を手酌して呑気な声を出す九尾の姿。

それはどこから仕入れたのか、というツッコミは無粋だろう。

「そうじゃなくて！ どうして女湯なのさー！」

「ワシがいつ男だと言った？ 性別なんか既に超越しとるわ」

「いや、それも違うと思うんだけど……」

なんか自分が思っていたのと違う、と心の中でツッコみつつ溜め息を吐く。ミナトとしてはもっと殺伐とした会談になると思っていたのだが、どうやら勝手が違うらしい。

しかし九尾がここにいるのは当然のことだ。ずっと尻尾のことはかり気にしていたのだから、どこならば綺麗に出来るかを最優先に考えるだろう。

そうして考えた結果がここだった。幸いこの温泉には来たことがあったし、場所もわかっていたので即決したわけだ。

まあ、夜が更けているので残念なことに女性客はいなかったわけだが。

「それよりなにか用事があって来たのじゃろう？ さっさと話したらどうじゃ？」

「そうだね。九尾、キミを封印をせずに木の葉に置くことが決まったんだ」

ミナトのほころぶ表情を見ながら、九尾は少しだけ目を見開いた。それもそうだろう。九尾は四代目がダンゾウを説得できると思っ
ていなかったのだ。どんな手段を使ったのか皆目見当もつかない。しかしそれが事実だと言うのだから愉快に思い、自然と笑みが零れてくる。

里にいてもいいという嬉しさとは違う。自分の息子の成長を見ている様な、そんなものだ。

「くくっ、まさか貴様にあの連中が説得出来るとは思わなんだわ」

「九尾のお陰だよ。クシナを助けてくれたのはキミだろう？」

「……チッ。いらんことはせんほうがよかったかのう」

ニコニコ笑うミナトに対して九尾が毒づくが、その表情は変わることはない。

助けた、というのには少し語弊があるが、結果的にそうなったのだからそういうことでいいのだろう。

九尾のチャクラというのは人を傷付ける効力もあるが、逆に傷を治癒する効力もある。前者が悪意だとすれば後者は善意によって付与される、そんな効力だ。

それを九尾が引きはがされる間に少しだけ残しておいたのをミナトは見抜いていたらしい。
本当に非の打ちどころのないイケメンだな、と改めて実感させられる。

「まあ、説得させた鍵に関してはわかった。で、それがどうした？」

「どうしたって……戻れるってことを伝えに来ただけど……」

「そうか。それならワシは戻らん」

少し困った様な表情をするミナトに対して、九尾はハッキリとした口調で断った。

「なっ！？　なんでさ！　せつかくみんなが納得してくれたんだよ！？」

「納得……ねえ」

焦るミナトに九尾は余裕綽々といった様子で顎を撫でた。

先程の会議の結果はみんなが『納得した』とは言えないだろう。

みんなは不承ながらも四代目を信じて『割り切った』だけだ。

あれ以上は反対することも出来ないし、反対したところでミナトの意見が絶対に変わることもない。

それならば全責任を四代目に押し付けて、失敗したときは自分たちはなにも関与はしていないと訴え、成功したときは四代目を称えればいいと、そう思って割り切ったにすぎないのだ。

そしてだいたいそんなところだろうと九尾も推測を立てていた。自分が出ていくまでの状況を見ていればそうなることくらいは誰にでも容易に想像できるだろう。

「貴様は戻る、と言ったな。それは『戻ることが出来る』というだけであって、戻るか戻らないかの選択権はワシにあるのじゃろう。そしてワシは後者を選択したまでじゃ。どこか不備があるのか？」

「なんでそうなるのか聞いてるんだよ！ 里にいればいいだろう！？」

「ならば聞くが、里にいてワシのメリットになることはあるのか？」

「それは……」

九尾の質問に答えることが出来ず、ミナトは口ごもりながら俯いた。

ミナトはただ九尾を孤独にすたくなかっただけだ。それは自分身の勝手な願いであり、九尾のためだと決め付けていただけに過ぎない。

九尾のことなんて結局なにも考えておらず、考えていたのは自分のことばかり。みんなと一緒にいれればいいことがあるだろうなんて適当なことが言える筈もない。

そしてそんな自分が悔しくて、ギョツと唇をかみしめた。

口の中に鉄の味がどろりと広がる。これは紛れもなく血だ。そしてそれは九尾の中にも流れているだろう。

九尾は人間となにも変わらない。そう思うとまた自分の無力さに苛まされ、吐き気がして、その血を唾と共に吐き捨てた。

「……ふっ、そんなもんじゃ。貴様がそんなに悩むほどのことでもない。これからどこに行こうとワシのメリットになるところはないじゃろう。が、デメリットはあるからそれは避けたい。そう考える」と木の葉におけるのは不可能というだけの話じゃ」

そういう九尾の表情はとても儂く、今まで見たことのないくらい
の優しい笑みを浮かべていた。

それを見たミナトは自分が情けなってくる。結局最後まで九尾に
心配をかけたたり、九尾からは多くをもらったりしただけで、自分か
らはなにもしてやる事が出来なかった。

それを考えると彼の方がよほど人間らしいだろう。醜悪な自分た
ちとは違う、心が綺麗な人間だ。ミナトにはそれが嬉しいのか悔し
いのか哀しいのかよくはわからないが、いいことに変わりないだろ
うことだけはわかった。

「それじゃあワシはそろそろお暇しようかのう」

「ま、待って！」

「ん？ まだなにかあるのか？」

立ち上がるうとした九尾をミナトは制止した。

なにかなんてものではない。言いたいことなんかたくさんあるに
決まっているだろう。それを九尾もわかって言っているのだから、
九尾の性格が悪いところがうかがえる。

そしてこれが今生の別れになるかもしれないのにどうしてそんな
に適当なんだと、ミナトはまた頭を抱えてしまう。

九尾にとつて自分とはその程度の関係だったのだろうか。

そう思わざるを得ないミナトだったが、今生の別れにしない為
になにかを言わなければならぬのでそれを頭から払拭して口を開い
た。

「本当に行くのかい？」

「言ったじやろう。ワシが木の葉におけるメリツトがないと」

「ダメだ」

「はあ！？　なんでだよ！？」

引き留められるなら未だしもまさか拒否されるとは思わなかったので、九尾は思わず若者口調で聞き返した。

年寄りみたいな話し方には慣れていた筈なのだが、不意に驚くとどうやら素が出てしまつらしい。

「そんなのダメに決まつてるだろ？　俺の立場も考えてくれよ。このまま九尾を逃がしました、じゃあ格好がつかないじゃないか」

「いや、知らねーよそんなこと。銘々の責任じやろうて」

そんなことを九尾のせいになされても困るだけだ。そもそも九尾の意見も聞かずに九尾の処遇を決めることが間違っていると誰も思わなかったのか。

これ以上話したところで水掛け論になることはミナトの何故か少しイラついた様な表情を見れば容易に想像できるので、九尾は諦めた様に溜め息を吐いた。

「はあ……それで、貴様はワシにどうしてほしいのじゃ？」

「俺が？」

「ああ、貴様が、だ」

九尾のいつになく真剣な眼差しに捕らわれ、ミナトの表情も自然

と引き締まってくる。

「えっと……うん。俺にはメリットとかデメリットとかそういうのは関係ないよ。里のみんながどうかかも全部。ただ俺が九尾についてほしいと思う。それだけだよ」

それがミナトの答えだ。自分以外の誰が九尾のことをどう思おうがそんなのは関係ないというなんとも自分勝手なもの。

しかしそのように自分を思ってくれている人がいるというのは嬉しいものだ。それは九尾も例外ではなく、それを聞いた瞬間に九尾から笑みが零れた。

先程とは違う鮮やかなそれに、ミナトは不覚にも見惚れてしまう。

「そうか……。まあ、それならいてやっても構わんぞ」

「え？　こんなのでいいのかい？」

「黙れ」

素っ頓狂な声を出すミナトに九尾は短く答え、その場に立ち上がる。

人間には尾獣の気持ちなどわからないだろう。

昔から忌み嫌われて、個としては誰からも必要とされずに生きてきた。そんな人間が本当に誰かから必要とされれば簡単に靡いてしまうものだ。

人間にとっては些細なことなのかもしれない。しかし長く生きてきた尾獣にとっては、そんな些細なことでも大きく感じてしまう。

「ワシはたとえ世界に嫌われても思ってくれる人間がいるならその願いを聞いてやるほど寛大なんじゃボケが」

「あれ？ 照れてぶへっ！」

「ふん、余計なことは言わんでええんじや」

ニヤニヤとしながら見つめてくるミナトを気持ち悪く思った九尾はボディブローを入れるとそのまま脱衣所へと入っていく。

そこでようやくミナトは九尾が女に変化していることに気付いた。まあ、状況的には殴られて当然かな、と思わなくてもない。

そしてそれから間もなくして温泉の従業員が駆け付け、ミナトを覗き魔に仕立て上げたのは言うまでもないだろう。

その九尾、奉公につき

「まさか九尾がお見舞いに来てくれるとはね」

「することがないから来ただけじゃ。勘違いするなよ」

「わかってるってばね」

ゲラゲラと下品に笑うクシナを一瞥して、ワシは思わず溜め息を吐いた。

マダラの騒動から約一週間。今までは血糖値が上がると問題があるので面会を謝絶されていたが、ようやくクシナと面会することが出来た。

本当は来る気はなかったんじゃないの。どうせ尻尾をモフモフする以外にすることもないし、暇潰しの感覚で来ただけじゃ。

「ミナトはどうしたの？」

「ああ……まあ、いろいろあって来れんらしい。そのいろいろは退院してから本人にでも聞けばええじゃろう」

「いろいろって？」

「ワシの口からは言えん」

クシナの訝るような口振りにワシは自然と目を逸らし、持ってきたフルーツバスケットの中からリンゴを取ってかじる。

ミナトが来ていない理由は一週間前の痴漢騒動のせいじゃ。あれで減給されて二週間の自宅謹慎をくらったらしい。

不幸中の幸いなことはそのことは火影の名誉として里の人間には伝えられなかったことと、クシナが入院してそれを知られないで済むことくらいじゃろうな。

ただ侮ってはいかんのが主婦の情報網。どこから風の噂程度に囁かれるのは間違いない。

そうなる可能性は高いじゃろうが、ワシとしてはそうなってほしくない。

そういうことは人伝より本人の口から伝えた方がええと思わんか？ いや、そうじゃないとミナトが干されるかわからんからそうじゃないといかんじゃろう。

「ふうん。まあもうすぐ退院だしそのときに聞くつてばね。

それより九尾はそのままの状態で里にいてもいいの？ 不法滞在とか？ まあ、上の連中は頭が固いから一回ほぐしてやろうかと思っただけど」

「やめとけ。ほぐすどころの話じゃないじゃろう。それにワシは正式に里に滞在する許可をもらっとるわ。つまらんことに貴様の旦那のせいだな」

たぶんクシナのことじゃから外部からの物理的な干渉でほぐすつもりじゃろうが、嫌いな人間に対してなら力の加減とか間違えて潰す可能性というのもあるんじゃないよ。

そんなことは普通はない。普通はあつてはならないのだが、この女の場合は有り得るから困る。

一度生で見たことがあるのじゃが、アイアンクローで人の頭が潰れたシーンは今でも忘れられん。

「ミナトが？ やっぱりミナトはわかってるってばね。それでもし危ないときは私の中に戻って来てもいいからね？」

「ふん、気が向けばの話だがな」

顔を見に来ただけじゃし、リンゴも食べ終わったのでそろそろ帰ろうと椅子から立ち上がって窓の方に向かうと袖を掴まれた。

振り向くとそこには何故か神妙な顔をしたクシナがいたので、ワシもその雰囲気の流れされて気が引き締まる。

「……なにか用か？」

「なんて言えばいいかわからないんだけど……ごめん。私のせいでこんなことになっちゃって……」

なにか言われるだろうとは思っていたが、まさか謝られると思っていなかったワシは驚いてちょっと変な顔をしたと思う。

よく考えればわかると思うが、ワシには謝罪される理由がないのじゃ。

確かにあのおときワシの言うことを信じて封印を解放しておけばそれがクシナにとっては最善だったじゃろう。ただ、そうしてもしなくてもワシにはなんの害もない。

現にあったのはちよつと痒いくらいの痛みくらいじゃった。それ以外には特になし、むしろ無理矢理剥がされたことでここにいれると言っても過言ではない。

あのおときクシナがワシの言う通りにしていたら間違いなくワシ共々波風家三人は里から追放されていた。

それに傷付けたのはこつちじゃからもし謝るとすればそれはワシの方なのだが、それは言うべきではない。

こうして反省することで次につながられるのならそれが最善じゃ

ろう。

「自分が痛い思いをして謝るなど貴様は馬鹿か。

「フーかあれじゃ。正しいと思ってやったことならそんなことを軽々しく口にするな。後からウジウジするくらいなら最初からやるべきじゃないじゃろう。責任を持つべきだとは思わんか?」

「それはそうだけど……はあ。それじゃあ痛い思いをさせた私に九尾が謝って」

「ふざけるな。貴様が勝手にやったことじゃろうが」

クシナが謝ったのは半ば自己満足も含まれておるじゃろう。

「そうやってなにかをよりどころにせんと耐えられんくらい精神の方も弱っておるといふことか。こんなときにいっしょにいてやれんなどミナトは最低の旦那じゃな。」

「まったく、痴漢などというわいせつな行為を働いた上に妻の一人も支えられんとは、とんだ甲斐性なしじゃのう。」

イケメンにも穴はあるらしい。

「え〜? じゃあもういいや。私の自己責任だってばね。それでこの話は終わり。」

「それで九尾はこれからどうするの? 里に残るんならやつぱり忍者になるの?」

「いや、忍者になる気は毛頭ない」

「何故か拗ねるようにして勝手に話を終わらせたクシナに呆れながら答えた。」

「え？　なんで？」

「なりたくないからに決まっておろう。どうしてわざわざそんなものにならねばならんのだ」

忍者は現代で言うところの派遣　バイトの方が近いかもしれないが　にあたるところじゃ。日雇いで決まった給料というのはそれなりの地位でなければ特になく、安い給料で死が付きまとう。しかも地道に稼ごうと思っても簡単な任務と偽って高ランクの任務だったりすることがたまにある。

そんなブラックな企業に入りたいなど正気の沙汰とは思えんわ。国からはギブアンドテイクなどと謳われておるがどう考えてもリスクが高過ぎる。それに忍者になるための試験も難しいと来た。

そういうのは好きなヤツだけがやればええんじゃ。幸い、ワシの場合はチャクラの塊をぶつけるだけで自衛は出来るからう。わざわざ金を払って忍術をならう必要はないじゃろう。

「でも九尾はチャクラの量とか凄いし、きっと良い忍者になれるってばね」

「ならねーって言っとるじゃろう」

ワシはうどん屋を経営するんじゃ。そのための準備も着々としてきとる。

うどん屋というのに特に思い入れはないが、働かずに食う飯は不味いし、なにもしてなかったら無理矢理忍者にさせられそうじゃ。

バイトをするとなったとしても裏で根回しされてクビにされて忍者にさせられるという流れも考えられる。

その点自営業はその心配はない。なにより自分の好きなようにやれるという点が大きい。

まあ、情報操作をされて客足が途絶えれば終わりじゃが、食物関係なら根強い客も捕まえられるので大丈夫じゃろう。

「まあ九尾がそう言うなら無理強いはしないってばね」

「当たり前じゃ。貴様らに口出しされる筋合いはない。それじゃあワシはやることあるから行くぞ」

「うん。頑張つて。あとありがとね」

ワシが窓の棧に乗って振り返るとクシナは笑顔で礼を言ってきた。これはたぶん今自分が生きておることに対してじゃろう。ワシがなんもせんかったら死んでおったことくらいは本人が一番理解してるはずじゃ。

「ふん。仮にも前の器じゃ。それくらいの奉公はしてやるわ」

改めて礼を言われるというのには少し気恥ずかしいものがあつたのでぶっきらぼうにそう言って、ワシは窓から飛び去った。

「一応ペットじゃからのう。飼い主に噛みつくわけにもいかんだろ
うっ」

その九尾、奉公につき（後書き）

今更ですけど九尾の名前どうしよう。

普通にタマモとかホウジとかシインタとかでいいんですかね。

その九尾、子供につき

「あつ、そうだ九尾。キミの戸籍登録が必要なんだ」

「戸籍……のう。必要なのか？」

「当たり前だろ？ これから里の人間として生活するんだからそういうのがいろいろと必要になるんだよ」

「ふうん、そんなもんか」

ワシが波風家の居間の椅子に座って尻尾を撫でていると、ちょっと顔を歪ませたミナトが話し掛けてきた。

さっきまで退院した直後のクシナに散々ボコボコにされていたのにもう立ち直ったのか。相変わらず復活するのだけは早いのがう。

「そんなものだよ。まずは名前だけどうする？」

「名前なんて九尾で十分じゃろう」

「それはまずいって。それくらいはわかるだろう？」

「……ああ、まあ、そうじゃな」

困った様な表情をするミナトを見て、少しだけ考えた後に返事をした。

確かに名前が九尾じゃといろいろと不備があるか。たとえそれが

本当にただの名前だとしても受け入れられないのが人間じゃ。

なにかに因縁をつけて迫害して来る可能性は高い。悪霊の祟りだとか、適当なことをでっちあげて噂を広めるじゃろう。

そして性質が悪いことにその噂というのはその人間の近くで起こったことをそいつのせいにならざるを得ないので、そいつは言い逃れが出来なくなってしまう。殺人時刻に現場にいれば誰でもそいつが殺人犯だと疑わないのと同じじゃ。

現にミナトはこうして覗き魔としてクシナにボコボコにされとる。まあ、コイツの場合は前科三犯ということがばれてこうなったわけじゃから自業自得じゃがな。

そこからは前に話した尾獣のときと同様じゃ。そうして広まる噂は尾びれ羽びれがついて拡大していき、その存在自体が悪だとされてしまい、過大な罪を背負わされてしまう。

哀しいことにそれが世の常じゃ。最初こそ迫害まではされんでも村八分くらいは普通に有り得るじゃろうが、最後は結局そうなるに違いない。

だから違う名前をつけて人を騙し、九尾ではなく一人の人間として受け入れられるということじゃ。

人として対等に扱われることなどは夢見ておらん。ただ、人や尾獣などという括りはなく、その存在を認めてほしい者にとっては苦痛でしかないことを平気で強いる。

自分たちの常識で全てを語ってさも正しいかのように言って来られるのは吐き気がするわ。

しかしそれがワシのためだとわかっているから複雑な気分じゃわい。

「チツ……それじゃあタマモでええわ。それがワシの真名じゃ」

「へえ、九尾の名前ってタマモっていうのか。なんで今まで教えてくれなかったの？」

「これからも教える気はなかったんじゃがのう……」

「それならどうして？ 確かに本名が望ましいけど別に偽名でも問題なかっただろ？ キミの名前を知る人間なんていないだろ？」

ワシが少し遠くを見つめながら言うと、ミナトは興味津々といった様子で顔を覗き込んできた。

確かにミナトの言う通り偽名でもなんの問題もなかったじやろう。しかしワシにもプライドというものがある。

まったく関係のない名前をつけてゴソゴソ隠れる様な真似はしたくない。それは誰がどう見ても安全を確保するための『逃げ』ではないからのう。

そういうのは嫌いじゃ。自分の身のために最低限は自分で戦うのは当然じやろう。誰かに頼りきるなど尾獣としても人としても恥じでしかない。

それに理由はもう一つある。

真名というのは仲が深い人間にしか教えないものじゃ。それを使って里の住人から呼ばれるということは、里の住人と親睦を深める気があるということの意味する。

たかが名前ごときでこんなことを考える女々しい尾獣は他にいらんじやろうな。

「まあ、一応信頼の証としてじゃ」

「ふふっ、よくわからないけど、やっぱり九尾はみんなと仲良くないらいたってことだよな？」

「そついうわけじゃねー」

一瞬驚いた顔をしたミナトだがすぐにいつも通りの笑顔になってそんなことを言ってきたので、ワシはぶっきらぼうに返した。

「まあまあ、そんなに照れなくてもいいって。顔がちよっと赤いよ？」

「照れてねーよ死ね」

「コラ、ナルトの前でそんな汚い言葉使ったらダメじゃないか。ナルトが不良になったらどうするんだい？」

「知るか。そんなの貴様らの責任じゃろう。それくらいで不良になるヤツだった、ちゅうことじゃ」

弄られることへの怒りと焦燥を感じていたが、直後の相も変わらない親馬鹿発言で一気に萎えてうんざりした。

ワシらが話している近くにゆりかごがあり、そこにナルトが寝かされているのだが、あいつは現在文字通り寝ている。それなのに汚い言葉を規制される意味がわからん。

ナルトはこの歳で睡眠学習が出来る様な天才児ではないじゃろう。どちらかというと努力肌のヤツじゃった記憶があるのじゃが。

それでも心配する様は将に親馬鹿じゃのう、と思っ。

「それより苗字は決めんでもええんか？」

「苗字？ それならずと前から決まってるじゃないか。波風っていう立派な苗字が」

「……は？」

何故か誇らしげにいうミナトに対して、ワシは唾然としながら聞き間違いかと思って聞き返した。

「だからキミの苗字は波風だろう？　波風タマモ。うん、いい響きだね」

「いやいや待て待て！　どう考えてもおかしいだろ！　なんで teme の苗字なんだよ!？」

「そんなの俺とクシナがキミを養子に引きとつたから当然じゃないか。あつ、もう書類は書いてあるからナルトの戸籍登録と一緒に出しに行くよ」

笑顔で告げてくるミナトにワシは肩を落とし頂垂れた。

どうやら聞き間違いではなかったらしい。ワシの処遇然り、そうやってなんでもかんでもワシの知らんところで決められるのは不快じゃが、これもコイツらなりの配慮なのじゃろう。

波風姓を持つておればある程度の安全は確保されるし、火影の息子となると安易に手を出せなくなる。他にもいろいろとメリットはあるが、デメリットはかなり少ない。

それを考えてやったかはどうかは知らんが、好意は有り難く受け取ろう。

今ならその書類を破り捨てることも出来るわけじゃが、そんな気が起きないということは、それを受け入れてしまっているということじゃ。

「貴様はワシの年齢を知っておるのか？」

「俺たちより年上だつてことはわかるよ。でも歳や出生、種族なんて関係ないだろう？　これからはなにがあつてもタマモは俺とクシ

ナの子だ」

そういうことを平気で言ってくるミナトに対して、ついつい頭を抱えてしまう。

ワシが里に九尾だとばれても匿い続けるということがどういうことかもわかっておらんじやろう。

所詮は口約束じゃからそこまで深く気にせんでもええかもしれん。だが、それでも心に引っ掛かるし、そう言われて困るのはワシの方じゃ。

照れるとかではなく、自分のせいで人の人生を狂わせてしまえば誰でも申し訳ないと思うじやろう。

ただ、ミナトの目を見る限りは引く気はないらしい。表情は変わらないながらもワシのことを真剣に見つめてきておる。

ワシは男に見つめられる趣味はないんじやがのう……。

「はあ……。もうなにを言っても無駄なのじやろう？ それならなつてやるわ、貴様らの子供に」

「うん。それじゃあこれからよろしくね、タマモ」

「ああ、これで合法でクシナの乳を吸えるわけじゃな」

「ぶっ！？ そんなこと絶対ダメだよ！？」

ミナトはワシの発言に何故か飲んでいたお茶を吹きだして驚いた。

「ナルトがよくてワシがダメな理由はないじやろう。養子だからとって本当の息子と差別するのか？ そんなことが許されると思っているのか？ 親が子供を差別するなど言語道断じやろう。ワシを養子に迎えるのならそれくらいの覚悟はしてみせろ」

「なんか大事な台詞の使いどころを間違えてる……?」

ミナトの言う通り使いどころを間違えた感じはあるが、そのことに対してじゃなくても、ワシを養子にするならある程度の覚悟は必要じゃろう。

こういう日常的なことでそついうのをわからせておかんといざというときに動けんかもしれん。

それを考慮して言っちゃつとるんじゃから感謝してほしいくらいじゃ。

「まあ、人妻には女としての魅力を感じんから安心せい」

母親としてはどうかはわからんが、な。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7523x/>

その九尾、人間につき

2011年10月28日19時25分発行